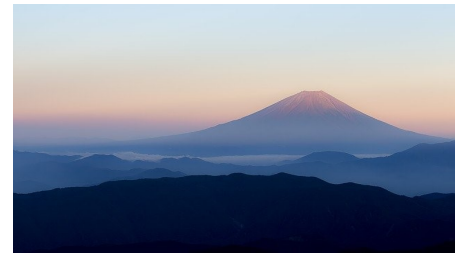




中北の地域社会（community）の心の交流（communication）をめざします

「だいじょうぶ」

中北教育事務所
副所長 有賀 望



明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては、「今年こそ」という思いを胸に、新たな年をお迎えのことと心よりお喜び申し上げます。また、日頃より中北教育事務所、地域教育関連事業にご理解とご協力をいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

新型コロナウイルスの感染拡大により、昨年度末から新学期の大半にかけて、学校現場は大きく混乱し、休業を余儀なくされた学校現場では、オンライン授業や宿題などで学びをつなげる努力をしてきました。再開後は感染防止対策を徹底する中で、学校ごとに工夫を凝らし、これまでの生活に近づけようと前向きに取り組んでくださっていることに対し、重ねてお礼申し上げます。

さて、新年を迎えるにあたり、この1年をどのように過ごしたらよいのか、思いを巡らせた方も多いと思います。明るい話題を探していると、様々な場面で表題の「だいじょうぶ」という言葉がたくさん使われていることに気づきました。中国から伝わったこの「だいじょうぶ（大丈夫）」という言葉は、元来「立派な成人男子」という意味だったそうです。それが「非常に強い」「非常にしっかりしている」「非常に健康である」といった意味へ派生し、現在では「間違いない」「確かである」という意味で使われています。この「だいじょうぶ（大丈夫）」という言葉について、私には今でも忘れることのできない思い出があります。

数年前、勤務校近くの路上で、中学生が乗用車と接触する交通事故がありました。その生徒は私が勤務していた小学校の卒業生らしいという知らせが入り、直ちに何名かの職員はその場に駆けつけました。その生徒は下校途中で、スクールバスから降りて道路の反対側に渡ろうとした際に、車と接触して転倒してしまいました。幸い大きなけがはなかったものの、車と接触した時の恐怖とショックで、震えてうずくまっていました。はじめに駆けつけた私は、「どうした？けがはない？どんなふうにつづかったの？」と普段よりは気遣ったつもりで言葉をかけました。すぐその後ろを走ってきた当時の養護教諭は、毛布を一枚手に持っていました。そして生徒の背中にそっとかけ、「だいじょうぶだよ。」とやさしく背中をさすりました。その生徒は緊張から解きほぐされたように、ほっとした表情を浮かべました。ほんの数秒の出来事でしたが、私との対応の差があらわになり、人を気遣うとはこういうことなのだと思えて気づかされました。この出来事は、未熟な自分への戒めとして今でも心に留めています。

学校現場では児童生徒に対して、様々な場面で適切な対応が求められます。当時、この生徒にかけた「だいじょうぶだよ。」という言葉は、言葉をかけられた生徒だけでなく、かけた本人の安心感にもつながったはずで、心を痛めている児童生徒の気持ちや状況を把握し、思いやりのある言葉や態度で接することは大変重要で、実践できることはとても素晴らしいことです。

新型コロナ禍において、効果的なワクチン開発が進むなど、収束に対する期待感も少しずつ高まってきています。教育関係者だけでなく、家庭や地域においても今を憂えることなく、目の前の子どもたちに安心感を与え、心にゆとりを育むために「だいじょうぶ」「だいじょうぶだよ」という言葉をたくさんかけていただきたいと思います。「あの時は大変だった」と明るく言える未来は必ず来ると信じています。きっと「だいじょうぶ」です。

本年が皆様にとって、希望に向かって大きく前進する年となりますようお祈り申し上げ、結びといたします。

中北.com no.5 コンテンツ

p1 中北教育事務所 副所長あいさつ

p2 甲府南高校、山梨県立科学館・帝京第三高校

p3 玉穂南小下河東分校・玉穂中下河東分校

p4 高根東小、ことぶき勤学院学生募集

科学の魅力に出会う機会を子ども達に

地球温暖化やエネルギー問題など地球規模の課題を解決し、国際的な競争力のある価値を創造するためにさらなる進展が期待される科学技術。その実現を可能にする創造性豊かな人材の育成に向け、子ども達の自然や科学技術に対する関心や探究心を高めるさまざまな活動がおこなわれています。そこで今回は、子ども達に科学の魅力に出会う機会を提供する2つの取組をご紹介します。

最先端の自然科学研究に触れる

山梨県立甲府南高等学校



未来の国際的な科学技術関係人材を育成するため、文部科学省が先進的な理数教育を実施する高等学校等に指定する「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）」。現在そのSSH4期目となっている山梨県立甲府南高等学校で、理化学研究所から新津 藍基礎科学特別研究員をお迎えし、『自然に学ぶ、自然を作る！？』と題したサイエンスフォーラムが行われました。新津先生は山梨県のご出身、東京大学大学院で理学博士号を取得され、その後イギリスのプリストル大学で4年間研究員として過ごされました。そのとき取り組まれた「膜タンパク質設計」の研究が、イギリスの科学誌Nature Chemistryに掲載され表紙を飾るなど、第一線で活躍する研究者です。その新津先生から、研究者というキャリアや研究者の日常、大学での生活やイギリスでの暮らし、そしてご自身の研究等についてお話をうかがいました。特に現在取り組んでおられる

合成生物学の研究についての解説からは、「わからないことをわかるようになる」学びの楽しさ、研究の面白さ、そしてその醍醐味が伝わってきました。講演後、サイエンスフォーラムに参加した生徒達からも、「日本と海外では研究環境などに違いがありますか」「どんなことを大切にしたら研究者になれるか」といったたくさんの質問が出され、新津先生からの「人生は曲がり道の連続でその先を見通すことは難しい。けれど正解なんてないから自分で通りたい道を選んでいけば、自分がHappyと思えるところに必ずたどり着ける」「今、必要なくても、この先に必要になるということもある。自分の武器になると思って、何でも勉強しておくといい」といったメッセージが、生徒一人ひとりの心に響き、

知的好奇心の扉が大きく開かれた様子がうかがえました。



科学の不思議を実体験

山梨県立科学館・帝京第三高等学校

一方、日頃から工夫を凝らした展示や実験、実演を通じ、楽しみながら科学に対する関心や理解を深めるとともに、科学技術が社会に果たす役割について考える機会を提供している山梨県立科学館では、「青少年のための科学の祭典2020」が行われました。この「科学の祭典」では、毎年、中学校や高等学校、大学、企業といったさまざまな団体が展示や実験、工作といった科学ブースを出展し、来場者が実際に手を動かして作ったり、触れたりする機会を提供しています。今年の出展団体の一つ、帝京第三高等学校科学部は、水棲生物の飼育・養殖（アクアカルチャー）と水耕栽培（ハイドロポニックス）を組み合わせたアクアポニックスというシステムを用いてメダカとバジルを共に育てる展示の他、



液体窒素や尿素を利用した実験や体験等を披露しました。学校の公式

Youtubeチャンネルでも科学の不思議さ、面白さを発信しているという同校科学部。今回は対面で、演示や実験の指導を行いました。来場した子ども達は科学部の生徒による丁寧な説明を受け、目を輝かせながら実験や体験に挑戦、「なぜ?」「どうして?」と考える探究心が高まっていく様子がうかがえました。一方、指導する高校生達にとっても、わかりやすく教えることの難しさを実感するとともに、科学の魅力を伝えることの素晴らしさを感じた1日となりました。

院内学級 広く 明るく リニューアル！

玉穂南小学校下河東分校
玉穂中学校下河東分校

山梨大学附属病院院内学級は、中央市立玉穂南小学校と中央市立玉穂中学校の分校になります。病気やけがの治療で、入院中の小中学生が治療を受けながら学べる学校です（退院後も通級が必要と認められた時は継続可）。入院中の児童・生徒一人一人に学習の空白を補い、できるだけ学習が止まってしまったり遅れてしまったりしないように学びのケアを行っています。この院内学級には、山梨県各地の学校に通学している児童・生徒が通級してきます。通級してくる児童・生徒は、学年、学習進度、そして、同じ学年でも使用している教科書が違うこともあります。もちろん、それぞれ病状も違います。状況によっては、病室から院内学級に通級できないこともあります。そんなとき、先生はベッドサイドまで行って、実施可能な学習指導をしたり、話し相手になったりしています。



小学校の教室

今年度、山梨大学附属病院の新病棟建設に伴い、院内学級の教室が広くなりました。以前の教室は、学校の普通教室の半分くらいの広さの部屋を、小学校、中学校、職員室に区切って、運営していました。児童・生徒の車椅子、点滴器具使用などで教室がいっぱいになってしまったり、配線で身動きがとれなくなったりするようなこともありました。このように物理的に大変な状況の中でも、院内学級の先生方は、学び方と環境の活かし方を工夫し、一人一人の児童・生徒の学びと、入院中や治療中であっても先生や友達とともにいることができる空間を守ってきました。狭い空間でも、風船バレーで体育をしたり、家庭科では調理実習もしたり、工夫次第で学びを続けてきました。



中学校の教室

新しく、広くなった院内学級は、職員室も小中学校の各教室もそれぞれ独立しています。その他にも、多目的実習室や教育相談室、教材室を兼ね備え、以前よりずっと広く明るく機能的になりました。さらにこれまでと大きく違うのは、小児科病棟に隣接しているところです。小児科病棟から通う児童・生徒にとって距離が近いことはもちろん、院内学級を支援してくださっている小児科のお医者さんや看護師さんにも近いということです。院内学級の存在が病院内で大切にされていることの表れだと感じました。



卓球とかいろんなことができたり遊べたりできるスペースができて楽しい！（児童・生徒の声）

広い多目的実習室ができたので、みんなで一緒に活動でき、教育の充実がさらに図れるようになりました。（院内学級の先生の声）

コロナ禍でも学習保障を！

○小学校では

病院を退院していますが医師の判断から院内学級に在籍して自宅から通級している通級生と、入院中の病棟生は、以前であれば一緒に学んでいたのですが、感染予防のために同じ時間帯に一緒に学ぶことができません。通級生と病棟生の教室への通級を午前と午後に分けたり、病棟生は通級できない時間帯にベッドサイドで学習したりしています。

○中学校では

コロナ禍以前には院内学級できていた授業が、現在は本校である玉穂中学校の先生や院内学級の先生によるオンライン授業になっています。もちろん、一人一人の学習内容と進度にあわせたその生徒のための授業がベッドサイドで提供されています。

※小学校でも中学校でも本校や地元校との交流をICTを駆使して行っています。

「病気が治ってから」というのではなく、入院治療中であっても、子供の成長・発達にとって、学びの機会は必要です。また、学習空白を補うだけでなく、治療に頑張っている友だちと楽しく遊んだり話をしたりすることで、患者から小中学生に戻ることができ、治療にも意欲的に立ち向かうことができます。

『院内学級パンフレットより』



「私たちは和太鼓の演奏を通して、自分の持っている良さを磨き、伸ばすことを目指してきました。そして皆さんの健康を祈って演奏します。」4年生の澄んだ声が体育館中に響きます。そして和太鼓の迫力ある演奏。11月14日（土）、北杜市立高根東小学校において、日頃の学習や文化的な活動の成果を発表する「学習発表会～未来～」が行われました。毎年、子ども達の成長の過程を見られる貴重な機会として保護者や地域の皆さんが楽しみにしているこの学習発表会。今年も多くの方々が、入場時の検温・手指の消毒、換気、三密を避けるために学年の発表ごとに観覧者の入れ替えなど、新型コロナウイルス感染防止のための万全の対策の下で、子ども達の発表を楽しみました。高根東小学校

は2019年4月、旧高根東小学校、高根北小学校、高根清里小学校の3校が統合し、自然豊かな八ヶ岳の麓に新たに誕生した学校です。そのため、3つの学校から引き継がれた伝統と文化が校内で融合し、新しい学校文化が形成されています。今回の学習発表会で披露された4年生の和太鼓の演奏もその一つであり、5年生が発表した清里開拓史の学習発表も、統合前の学校の伝統の上に新しい気づきや学びを加えたものとなっていました。今年も、新型コロナウイルスの感染拡大防止策として臨時休業や分散登校など、これまでにない経験をした子ども達。発表会の中では、「学校に行ける日を夢見ていた」「友達に会えることを楽しみにしていた」など、当時のことを振り返る場面も。ステージ上で精一杯自分の役割を果たした子ども達の誇らしげな表情から、互いの個性を認め合い、よりよいものを創り上げようと学校が一つになって学習発表会に向けて準備を重ねる中で、未来への希望が生まれ、学校全体の連帯感がより一層強まった様子が伝わってきました。



「山梨ことぶき勸学院」令和3年度の学生募集について

山梨ことぶき勸学院では生涯学習のニーズに対応し、以下の要領で令和3年度の学生を募集します。

- 入学案内・募集要項配布：令和3年1月下旬から
(各市町村の教育委員会や教育事務所などで配布予定)
- 出願期間：令和3年2月1日（月）から（定員になり次第締め切り）
- 修業年限：2年（1年間で25講座実施予定）
- 講座日：原則として火曜日（月平均2日）
- 費用：入学後に基本学習費として16,000円を納入

お問い合わせ先：山梨ことぶき勸学院 電話 055-233-6947



第2回中北地区地域教育推進連絡協議会・人権教育指導研修会

日時 令和3年1月28日（木） 場所 北巨摩合同庁舎
研修会（講演会）

「児童虐待の現状と課題～今、私たちにできること～」

講師 山梨学院短期大学 保育科教授 樋川 隆 氏

詳細は中北教育事務所HPをご覧ください



Oshane B, CC BY-SA 4.0 <<https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/>>, via Wikimedia Commons